



蒲郡情報ネットワークセンター・生命の海科学館展示室

生命の海科学館3階の常設展示では、地球誕生から人類の出現までのおよそ46億年の地球史を、「原始地球の時代」「海の誕生・生命・酸素の発生」「生命の爆発」「魚たちの進化」「海のハエ類、イクチオサウルス」の5つのテーマに分け、化石・隕石などの標本を通してダイジェストで紹介している。各展示コーナーには、VIT(Visual Information Terminal)と名づけられたコンピューター端末が設置されており、各コーナーや標本の解説などを動画やテキストで閲覧することができる。人口約8万人の蒲郡市の情報化の先鋒として設立された情報ネットワークセンターに、自然科学を中心とした生涯学習施設として併設されたのが、生命の海科学館である。自然史をテーマとした科学館であると同時に、情報ネットワークセンターのマルチメディア・ショールームであり、この地域の重要産業である観光スポットとしての役割も担っている。

目 次

● 愛知県博物館等職員研修会	2
● 第30回東海三県博物館協会交流研修会	3
● 「平成17年度部門別研修会」の報告	4
・自然科学部門研修会	
・美術部門・歴史民俗部門合同研修会	

愛知県博物館等職員研修会

平成17年11月16日(水)、17日(木)に平成17年度愛知県博物館等職員研修会を開催し、参加者は1日目が67名、2日目が14名であった。

1日目の研修は「災害について考える－地震－」をテーマに講演会を行った。昨今、大規模な地震・水害などが相次ぎ、各地の博物館施設も被災していること、また愛知県下でも東海地震、東南海地震の可能性が指摘されていることから最も急務の課題と捉え、テーマを決定した。今回のテーマを決めるにあたっては、平成16年に静岡県博物館協会で行われた研修会から大いに刺激を受けた。

当初、研修内容は、災害に向けてのネットワークづくり等も考えたが、初回は過去の事例から学び、東海地震・東南海地震についての基礎知識を知り、図上訓練によるシミュレーション、そして事例見学することで、地震についての各人の意識を高めることを最優先とする内容とした。

■阪神大震災・中越地震について

講師：森田 稔氏

(京都国立博物館学芸課長)

■東海地震と東南海地震予知情報に対する 愛知県美術館の取り組み

講師：長屋菜津子氏

(愛知県美術館学芸員)

■災害図上訓練(DIG)について

講師：田中善明氏

(三重県立美術館学芸員)

■愛知県美術館の事例(バックヤード)見学

講師：村田真宏氏

(愛知県美術館美術課長)

■質疑応答

■情報交換会

森田氏には、過去の事例を大局的・総合的に報告いただき、その上で博物館協会に対し、被災した際の連絡網の中心となるようにという課題もいただいた。長屋氏の報告は、東海地震と東南海地震についての簡潔な説明とそれに対する愛知県美術館のこれまでの取り組み

を紹介するもので、その後の村田氏との共同でのバックヤード見学とあわせ、参加者の関心が最も高い内容の一つであった。田中氏の災害図上訓練についての報告は、地震の被害をよりリアルに想定することで対応策を検討するというもので、今後、実際に研修会で取り上げたい内容であった。

また、当日は静岡県博物館協会の事務局担当で、災害対策ワーキンググループにも所属されている静岡県立美術館の飯田真主任学芸員が自主参加し、静岡の取り組みについてご紹介くださいました。なお、飯田氏からは同協会の地震に対する取り組みの内容をまとめられた研究紀要を頂いた。ご興味のある方は、佐藤までお問い合わせを。

情報交換会でも講師の森田氏、田中氏、そして飯田氏を取り囲んで熱心に話し込む参加者の姿があった。これも大切なネットワーク構築である。今後もこうした機会を積極的に利用していただきたい。

研修会の2日目は、愛知県美術館と徳川美術館の展覧会見学があり、愛知県美術館深山主任学芸員、徳川美術館並木学芸員より説明を受けた。

今回の研修会に先立って、6月の総会の際には中越地震により施設・文化財が被害をうけた新潟県の十日町市博物館の石原正敏学芸員をお招きし、ご講演をいただいた。11月実施の本研修会に続いて、別途報告があるが、歴史・美術部門合同の災害をテーマとした研修も18年2月に行われた。

愛知県博物館協会は、災害対策について急務の課題であると認識し、次年度以降も継続的に研修会の開催や情報の発信などを行いながら、同時に災害に対する愛知県内ネットワークなるものも検討していきたいと考えている。各館園の皆様には、これらについて是非積極的な意見をお寄せいただきたい。

(愛知県陶磁資料館 佐藤一信)

第30回東海三県博物館協会交流研修会

東海3県（愛知・岐阜・三重）の博物館関係者が一同に会して友好を深め、それぞれの館が抱える課題などについて情報交換する恒例の研修会が11月4日（金）名古屋市科学館サイエンスホールで77人の参加の下開催された。

参加者内訳：愛知県 23館36人
岐阜県 16館23人
三重県 14館18人

今回は文部科学省が推奨する「学校と博物館の連携」をテーマに、研究成果と連携の事例が次のように紹介され、実態を具体的に学習できるよい機会となった。来年度（第31回）は岐阜県において開催される予定。

① 英国の事例紹介

永田祥子（武豊町立衣浦小学校）

② アンケート集計結果と今後の学校・博物館連携のあり方

杉浦貴史（愛知教育大学大学院2年生）

③ 学習内容をふまえた学校・博物館連携の方向性

斎藤仁志（愛知教育大学4年生）

平賀信夫（愛知教育大学）

三重県の事例発表

「学校と博物館の連携～

松坂市文化財センターの場合～」

松坂市文化財センター 主任：福田哲也

岐阜県の事例発表

① 「スクールミュージアムの推進について」

岐阜県美術館

学芸担当課長補佐：堀川厚則

② 「岐阜県博物館での博学連携について」

岐阜県博物館

教育普及担当課長補佐：柘植卓信



「平成17年度部門別研修会」の報告

<自然科学部門研修会報告>

果たして使い物になる石器をつくることができるのか。

平成18年2月17日(金)、そんな疑問(?)に果敢に挑戦するという研修会が、晴天の木曽川河畔にて行われました。

今回は、名古屋大学博物館の吉田英一氏と東田和弘氏にも講師として参加いただき、有意義な会となりました。

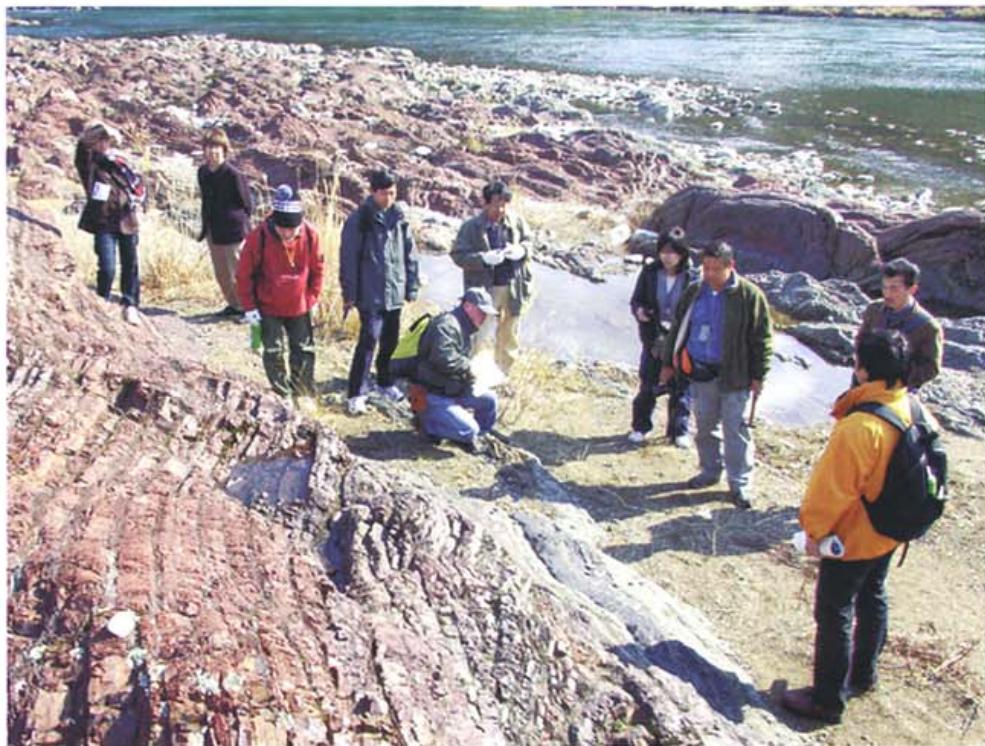
実は、愛知県犬山市と岐阜県各務原市鵜沼地域は、地質学的にとても有名です。約2億5000万年前(古生代と中生代の境界)、地球史上最大規模の生物絶滅事件を解く手がかりとなった場所だからです。

生物種の数で実に95パーセントもの生物が絶滅したといわれるこの出来事については、今やかなり知られるところとなりましたが、その頃の地層がこんな身近に見られることは意外と知られていません。

そこで、まず、この手がかりとなった地層を見に行くことにしました。木曽川においては、赤茶けたチャートと呼ばれる岩石が、規則正しい層をなして、そらじゅうに露出しています。ところが、ちょうど大絶滅があった時期の近い部分だけが黒っぽく、この色の違いは鉄の酸化状態の違いによるものと考えられます。

このことが根拠となって、大絶滅の原因が酸素不足ではないかと言われるようになったのです。その真偽はともかく、興味深い学説がここで生まれたことに感動するのであります。

つぎに、周囲にころがっている小石に目を向けました。どの岩石が石器に向くのか、そんな視点で岩石を観察していただきました。改めて川原の小石を見てみると、その種類の多さに驚かされます。石器というと黒曜石を連想する方が多く、みなさん最初のうちは割れ口の鋭くなる岩石をさがしていたようです。実は、今回つくってみようというのは、ナイフ状の磨製石器であることをお伝えし、磨きやすく刃こぼれしにくい岩石を探していただきました。



木曽川の露頭見学



なぜか夢中になる石器づくり



完成した磨製石器(石包丁)



自作石器の切れ味をためすために野菜を切ってみる



自作石器の切れ味をためすために肉を切ってみる

そして、いよいよ石器づくり。みなさん真剣な表情で岩石を磨いていました。大人でも結構夢中になってしまふものようです。実際に肉を切ってみると、その切れ味を誰もが自画自賛。原始人が石器で肉をさばいていたであろうことを妙に納得してしまうのでありました。最後は、石器で切った肉と野菜でカレーライスをつくり、満足の研修会となりました。

(名古屋市科学館 学芸員 西本昌司)



自作石器で切った肉と野菜でつくったカレーを食べる

参加者

日本モンキーセンター 園長 加藤 章
研究員 高野 智
岩田洗心館 館長 岩田正人
武藤紗絵

知多歴史民俗博物館 館長 千賀康雄
鳳来寺山自然科学博物館 学芸員 加藤貞亨
名古屋市科学館 学芸第一係長 鎌田隆行
名古屋大学博物館 助教授 吉田英一
名古屋大学博物館 助手 東田和弘
名古屋市科学館 学芸員 西本昌司

(敬称略)

〈美術部門・歴史民俗部門合同研修会報告〉

平成18年2月24日(金)、「災害に備える」をテーマとした合同研修会を開催し、研修担当者2名と事務局2名を加えて32館38名の参加者があった(会場は愛知芸術文化センター12階アートスペースEF、担当は愛知県美術館・博物館明治村)。今回のテーマは、平成16年度の職員等研修会のテーマ「虫菌害からの資料保存」、歴史民俗部門研修会の「災害や市町村合併等からの資料保存」、そして本年度職員等研修会での「大規模地震対策」といった流れを受けたもので、作品・資料の具体的な安全確保や罹災後の救済策について考えた。

■ 午前の部:「安全に展示するには ～災害に強い展示法～」

日本通運美術輸送からお三方を講師に迎え、地震による作品・資料の転倒や落下防止を防ぐ方法についての講義と実習をおこなった。講義は駒田博史氏により、ケースや台・照明器具の固定やガラスの飛散防止といった一般的な事項と、陶磁器等の揺れ止めとしての重石や緩衝材料等といった小物の紹介、また各社の免震装置の特徴についてご説明いただいた。このうちワックスやゼリー状の粘着性固定素材に



日本通運美術輸送の3名の講師

関しては参加者から、策品・資料に対して除去の難しい付着や浸透の懼れがあることも指摘された。

実習は高桑英揮氏と中村勝敏氏により、陶磁器のテグス固定を主とし、あわせて梱包や収蔵庫での作業に役立つロープの結び方などについて行われた。参加者は2班に分かれ、まず全員がロープの切れ端を持ってテグスの結び方を教わった後、交代で実際に陶磁器を固定してみた。ふだんは輸送展示業者にまかせがちな作業だが、作品や台の形状と大きさに応じてのテグスや釘の角度設定など、展示の計画時からの参考にもなったと思われる。



まずは紐を使ってテグスのしばりかた



実際にテグスで固定

■午後の部:「資料を災害から守る ～被災資料の救済方法」

阪神淡路大震災後、史料の保存を目的に組織された「歴史資料ネットワーク」の事務局を務めておられる神戸大学から、助教授の奥村弘氏と助手の松下正和氏において頂いた。



質問に応えられる講師

奥村氏からはネットワークの十年間にわたる活動の歩みについて伺った。ここで対象とされる資料については、「地域歴史遺産(地域文化遺産)」という考え方方が示され、2004年の内閣府「災害から文化遺産と



奥村氏による講義と実習

地域をまもる検討委員会」による答申においても、法律で規定されている文化財だけでなく、広い意味で歴史的な景観やまちなみ等空間的なもの、未指定の文化遺産を含め地域の核として認識されるもの、とされていることが述べられた。こうした考えに基づいて、地域住民・自治体・専門研究者の3者が保全すべき地域遺産についての合意を持ち、地域防災計画のなかに項目を盛り込むことが重要とのこと。美術館に携わる者としても、文化遺産についての認識を広げさせられるお話を聞かせて顶いた。

松下氏からは、水損史料(水や泥に浸かった文書類)の処置方法について、実際に冊子を水に浸しての実演をあわせた講義。現状の記録(撮影・スケッチ)と応急処置(キッチンペーパーによる乾燥、洗浄やエタノール噴霧による殺菌)、劣化やカビの繁殖を抑えるための冷凍保管から真空凍結乾燥処理までの手順などをご説明いただいた。主として墨で書かれた紙資料への方法であり、絵の具を用いた絵画などには適していると言えないとのことではあったが、資料を所蔵している一般市民の方々などに、応急処置や専門家への連絡法を広めようという姿勢にも、学ぶべきものがあった。

(愛知県美術館 深山孝彰)



史料を開く



水をつけた史料を開く

「愛知の博物館」 No.83

発行日 平成18年3月31日

編集・発行 愛知県博物館協会

〒460-0008

名古屋市中区栄二丁目17番1号

名古屋市科学館内

TEL (052) 201-4486

FAX (052) 203-0788

<http://www.ncsm.city.nagoya.jp/>